

存在と神を結ぶもの—ハイデガーの無底の神学

青山学院大学 茂 牧人

ハイデガーは、『カントの純粹理性批判の現象学的解釈』（1927年/28年冬学期講義）において、プラトンやアリストテレスやカントが凌駕されているということは意味のないことであり、外面的な進歩などというものは哲学にはないと述べた後、しかし今や「カントを、彼が自分自身で理解していたよりもよりよく理解するという要求」（GA25, 3）について論じている。つまり、カントを正しく源泉に遡って理解するときに、カント自身が理解していたよりもよりよく理解できるのではないかと。

我々の時代において今存在や神という概念は、意味を失っている。そのようなときに、存在や神が語られていたものの源泉や基礎に遡って正しく理解するという解体の作業を行なう必要がある。それによって、その概念が今語られているよりも、よりよく理解できるようになる。そのような解体の作業を繰り返し行なうことによって、その概念の本来の意味を回復するのである。

中世哲学以来一般的に神は、存在として捉えられている¹。しかしハイデガーは、その存在の思索において旧来の存在概念を克服しようとした。存在は、存在者ではないし、ましてや事物存在者（Vorhandenes）でもないのである。またニーチェ以来旧来の形而上学で前提とされてきた神は、死んでしまった²。神は、もはや絶対者あるいは無限者として事物存在者のように表象されてはならないのである。ここでもう一度存在と神について思索しなおす必要がある。ハイデガーは、まさにこの課題に取り組んだのである。今存在と神と人間とは、どのように思索されなおされなければならないのか。そのとき彼は、聖書に示された信仰の生の事実性やドイツ神秘思想に立ち返り、その伝統の中から新たな思索を開始した。それが1930年代の彼の思索に結実していくのである。今回は、その1930年代を中心に展開された彼の思索の見取り図を描きたいと思う。

従って第1節において、存在を思索しなおすにあたって、ハイデガーがいかに過去の哲学の伝統の中で思索していたかを示す。ここではとりわけシェリングの自由論を取り上げる。さらに第2節で、そのシェリングの自由論などにおける思索のダイナミズムの伝統の内に立って思索された事柄、いかにして現存在と存在との思索を展開していったかを、ハイデガーの著作に年代順に沿って追っていきたい。取り上げる著作は、「根拠の本質について」（1929年）、『形而上学入門』（1935年）、1930年代の真理論の諸著作、さらに『哲学への寄与』（1936-38年）、最後に『根拠律』（1955年/56年講義、1956年講演）である。そこで存在が深淵・脱根拠として思索されてくる。第3節において、その深淵・脱根拠とし

¹ E. Coreth, „Gott im philosophischen Denken“, Stuttgart Berlin Köln, 2001, S.106. 例えば、トマスは、「神は自存する存在そのものである（*ipsum esse per se subsistens*）」（『神学大全』（I.4.2））で述べている。

² F. Nietzsche, „Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe“, Bd. 3, München, 1980, S.480f.

での存在の思索に関わる神の思索を論じる。そこでは『哲学への寄与』と『原存在の歴史』（1938年/40年）を用いて、ハイデガーの神の思索の意図を解明する。結びで、その存在と神との思索の位置づけと意義について論じようと思う。

第1節 神の無底から存在の深淵・脱根拠へ

ハイデガーは、1926年4月26日にトートナウベルクからヤスパースに宛てて手紙を書いている。「私は、あなたに今日もう一度シェリング小著作集のことで明瞭に感謝を述べなければなりません。シェリングは、たとえ概念的にはより無秩序であるとしても、ヘーゲルよりかなり大胆に先に進んでいます。私は今自由論を読み始めたところです。自由論は、私には非常に価値があるので、私がそれをおおまかに一度だけ読んですまそうと願ってはいません」³。彼は、この頃ヤスパースからシェリングの小著作集をもらい、彼に謝意を述べている。そして特にシェリングの自由論を高く評価して、自分の思索に活かしたいと願っている。1927年9月27日付けのヤスパース宛の手紙でも、ハイデガーは、「あなたが私にシェリング小著作集を送ってくれて以来、自由論は私から離れたことはありません」⁴と述べる。ハイデガーにとって、シェリングの自由論は、特別に大事な著作となっていたことがわかるのである。

そしてその自由論の講義は、1936年夏学期講義として結実することになる。ハイデガーは、この講義録で、丁寧にシェリングの意図を追っていく。この自由論という著作は、体系と自由、必然性と自由との相克の問題を、汎神論の神の中で超克するという問題設定で始まる。シェリングは、汎神論の中でこそ、つまり人間が神へ従属することで、本来的な意味での自由が成立するという。さらに自由は、善と悪の能力であるから、結局自由が成立するためには、なぜ悪がありうるのかというその根拠を求めることになる。そしてシェリングは、神の中に実存と根底、光と重力という二重の力を見出して解決しようとする。実存と根底の力は、自分の外へと表現しようとする力と自分の内へと引き込もうとする力の相克である。両者の力が調和している間は、善となるが、そのバランスが崩れ、根底の力に支えられた我意が普遍意志を支配しようとするとき悪が生じるという。しかしシェリングは、さらにこの実存と根底との両者の緊張関係の起源として無底（Ungrund）をみようとする。ハイデガーもシェリングに倣って、この講義録で、絶対的無差別（absolute Indifferenz）としての無底を指摘している（GA42, 279f.）。

この無底は、どのような意味があるのか。一つは、実存と根底という二つの相反する強い緊張関係には、底が抜けているような深淵が潜んでいるはずであるという確信である。それ故、無底は、絶対的無差別として無（das Nichts）であり、その無というのは、「あらゆる存在言表に対して無である」（GA42, 280）という意味での無であり、要するに述語不

³ W. Biemel und Hans Saner (Hrsg.), "Martin Heidegger Karl Jaspers Briefwechsel 1920-1963", Frankfurt a. M. und München, Zürich, 1990, S. 62.

⁴ Ebenda, S. 80.

可能性 (Prädikatslosigkeit) を意味しているのである。しかし第二に、この無底は、無ではあるが、価値のないものなどではなく、実存と根底との相反する力の緊張関係が出現してくる源泉なのである。「この統一は、それ故まだ根底と実存との二元性以前にある。この統一においてまだ二元性は区別されていない。この統一は、それ故また従属しあうものの統一 (同一性) ではなく、この従属しあうものは、それ自身この根源的統一から出現することになるのである」 (GA42, 280) と述べられる。つまり、この無底は、実存と根底との二元的な相反する働きを生み出す根拠でもある。

論者は、今回の発表で、まずハイデガーの思索が、このシェリングの自由論の神の思索と親縁性をもっており、このような神秘思想の伝統の中で生起していることを示そうと思う。このシェリングの無底の概念と、ハイデガーの深淵・脱根拠・脱根底 (Abgrund) の概念とに類縁性があることは、既に指摘もある⁵。しかし論者は、さらに実存と根底という出現していく力と引き込む力という二つの相反する緊張関係とそれ自身を生み出す無底というモメントのシェリングなどの神秘思想の思索の伝統の中で、ハイデガーの思索のダイナミズムも見通せると思うのである。実をいうとハイデガーにとっては、そのような場こそ、神が関わってくる場である。

シェリング自身は、この実存と根底という緊張関係とそれを生み出す無底という契機を神の中に見ようとしている。しかしそのダイナミズムをハイデガーは、存在の場で見ようとする。それ故確かに場面は異なっているのである。ハイデガーの場合、そのようなダイナミズムの働く存在という場にさらに神が関わってくる形となるのである。その思索が、いったい何を意味しているのかを問わなければならないと思う。

第2節 ハイデガーの深淵・脱根拠について

1) 「根拠の本質について」(1929年)における深淵・脱根拠について

本書においては、ハイデガーは、まだ存在自身の思索を展開してはいない。存在論的差異を、現存在の超越(Transzendenz)に基づけようとしている。存在者が、命題の内に現れる根拠として存在者が前述定的に開示されている存在(者)的真理 (ontische Wahrheit) とその存在者の現れを可能にする存在の真理を思索する存在論的真理 (ontologische Wahrheit) の区別を現存在の超越に基づけようとする。つまり現存在の超越とは、現存在自身が世界へと超投 (Überstieg) することであり、この超投において現存在が存在者の中に入り、存在者と交渉できることを意味している。

しかしこの超越は、自由として根拠への自由となる。しかもこの根拠への自由は、基づけること (Gründen) として、1. 建立すること (Stiften)、2. 地盤を受け取ること (Bodennehmen)、3. 根拠づけること (Begründen) の三つの働きとなる。ここでは第一の建立することと第二の地盤を受け取ることとの関係が重要となる。両者は、『存在と時

⁵ D. O. Dahlstrom, 'Heidegger and German Idealism', in: H. L. Dreyfus and M. A. Wrathall (ed.), „A Companion to Heidegger“, Oxford, 2007, p. 74.

間』の内・存在の投企 (Entwurf) と被投性 (Geworfenheit) の契機に相当するといえる。本書は、存在論的差異を、現存在の世界への超越に基づけていた。その超越は、世界への超越として根拠への自由であった。それ故第一の投企にあたる建立することの働きが、より重要であったはずであり、それを徹底化していくことで、存在論的差異を根拠づけることができるはずであった。

しかしハイデガーは、この論考の最後に以下のように述べるのである。「しかし現存在は、世界を投企する、存在者の超投において自己自身を超投しなければならない。それによって自己をこの高まりから真っ先に深淵・脱根拠として理解することになる」(GA9, 174)。つまり、この超投つまり投企の徹底化の果てに、自己の足元に深淵・脱根拠を覗き見ることになるのである。現存在の世界への超越に一切に基づけようとするときに、その試みは破れをみるといっているのではないだろうか。超越論哲学の徹底化の果てに、その挫折を意味しているともいえる。

さらにその次の段落で、ハイデガーは、「しかし根拠への自由の意味での超越が最初にして最後に深淵・脱根拠と理解されるならば、それとともに現存在の存在者の内でのまた存在者による捕捉と名づけられることの本質が先鋭化される」(GA9, 174f.) と述べるのである。つまり、根拠への自由の第一の契機の建立することと第二の契機の地盤を受け取ることとの相反する緊張関係、投企と被投性との力のせめぎあいの根源に深淵・脱根拠が潜んでいることを意味している。投企を徹底化するとき、被投性の力が増し加わってくる、「すべての世界投企は、それ故被投的なものである」(GA9, 175) といえる。そしてその源として深淵が広がっている。投企と被投性とのせめぎあいは、その緊張関係を維持し続けることができない。必ずそこに破れを見ることになる。つまり深淵・脱根拠が潜んでいる。従ってこの深淵・脱根拠は、無力 (Ohnmacht) といえるのである。

ただハイデガーは、この深淵・脱根拠が、投企と被投性とのせめぎあい、緊張関係を出現させるとは言っていない。深淵は、根拠への自由を出現させる根拠であるという積極的な論述はない。しかし少なくとも、二つの相反する力の緊張の淵として深淵をみていることは確かであろう。

この 1929 年の段階では、ハイデガーは、この投企と被投性の緊張関係とその源にある深淵とを現存在の世界・内・存在あるいは超越の中に見取っている。つまり、存在の真理の問題は、まだ現存在の世界・内・存在の場面で理解されている。それ故ここでの深淵・脱根拠は、現存在自身の足元に広がる深淵であるといえるであろう。

2) 『形而上学入門』(1935年)における深淵・脱根拠について

では次に『形而上学入門』(1935年夏学期講義)においては、どうであろうか。まず形而上学の問いは、存在の問いとなることが述べられる。そこからハイデガーは、存在の語源が三つあるという。第一にゲルマン語の *ist* に当たるもので、これは生を意味する。第二にゲルマン語の *bin* や *bist* に当たるもので、光の中に発現する、現象することを意味してい

た。第三にゲルマン語の *wesen* に当たるもので、これは住むや滞在することを意味している(GA40, 74f.)。

さらに「存在と生成」「存在と仮象」「存在と思索」「存在と当為」という存在に対抗する語義を考えることによって存在を限定しようとする。ハイデガーが、深淵・脱根拠を論じるのは、その中でも「存在と思索」の項目である。

思索(*denken*)とは、もともとロゴスのことであった。ロゴスは、「集めること(*sammeln*)」(GA40, 132)、「集約態(*Gesammeltheit*)」(GA40, 136)を意味する。そこからハイデガーは、ロゴスとは、「互いに離れようとするものを根源的に一つにする統一」(GA40, 140)であるという。つまりロゴスは、互いに分離し対抗して争っているものを一つの従属性へ齎すことになる(142)。

さらにそこからパルメニデスの「思索(*noein*)と存在とは同一である」という言葉を解釈して、ノエインは聴き取ること(*vernehmen*)を、つまり引き受けること(*hinnehmen*)を意味しているという(GA40, 146)。この聴き取ることとしてのノエインは、存在と同一なのである。ここで思索と存在を主観と客観という近代の図式で考えてはならない。そうすると主観が、自分の外に立てた対象を観察することになってしまう。そうではなく、存在とは、フュシスとして、現象すること、非覆蔵性の中に踏み入ることであるから、そこにはその現象を聞き取り、受け入れるものが帰属しているはずである(GA40, 147)。それ故、存在が支配するところには、聴き取ることも生起する。聴き取るという知が働くのである。従って存在には、聴き取る人間が従属していることになる。存在と思索は、相互制約する。それ故、存在と人間は、相即するのである。従って人間とは、存在から規定されなければならない。しかも存在とは、まさに「ポレモス、つまり存在の相互抗争においてのみ、神々と人間との相互分離・出現(*Auseinandertreten*)がでてくる」(GA40, 153)ことを意味しているのであるから、その神々と人間との相互分離・出現を一つにする集約態を聴き取ることによって、人間は存在に従属するのである。

ハイデガーは、ここからソフォクレスの「アンティゴネー」の「不気味なものはいろいろあるが、人間以上に不気味にぬきんで働くものはない」(DA40, 155)という言葉を解釈する。そこで彼は、人間を不気味なもの、つまり「深淵・脱根拠・脱根底(*Abgrund*)」(GA40, 158)として捉えるのである。これは何を意味しているのか。人間とは、単なる思考能力をもった動物と規定できはしない。そうではなく、人間にとってはなはだしく居心地の悪いもの、つまり「根底において海や大地よりももっと離れ、もっと制圧的なもの」(GA40, 165)こそが、「そもそも人間がようやく自分自身で人間としてありうるための根拠」(GA40, 166)なのである。

つまり、人間は、この存在の相互抗争(*Auseinandersetzung*)、ポレモスによって本質を規定されているのであり、そこに聴き従うときに始めて本来の人間となるのである。ここから考えられることは、この神々と人間との相互抗争を集約し、そこに聴き従うことが、人間の本質であるということである。

しかもこの相互抗争の根源として、深淵・脱根拠が潜んでいるという。ここでも、神々と人間との離脱・出現（Heraustreten）という相反する働き、緊張状態を集める存在の思索の源に深淵が口を空けていることが示唆されるのである。

しかもそのこの深淵・脱根拠は、「無」（GA40, 161）と述べられ、さらには「死」（GA40, 167）とも呼ばれる。「人間は、死ぬようになるとき初めて逃げ道なく死に対してではなく、絶えずしかも本質的に死に対しているのである。人間は存在している限り、死の逃げ道のなさの中に立っている。そのようにして現一存在は、生起する不気味さ自身である」（GA40, 167）と述べる。この深淵・脱根拠は、たえず無や死として人間の根拠であることがわかる。

ここでハイデガーは、存在を人間の本質として述べている。しかもその存在は、神々と人間との離脱・出現としての相互抗争であり、その根源には死としての深淵・脱根拠が広がっているのである。

3) 1930年代の真理論における深淵・脱根拠について

1930年7月14日カールスルーへ、同年10月8日ブレーメンで、同年12月11日フライブルクにてハイデガーは、「真理の本質について」にあたる講演を行なった。1930年9月2日付けのブルトマン宛の手紙には、これらの講演のヴァリエーション版の講演をマールブルクでも行なうことを告げていて、そのタイトルは、「哲学することと信仰すること」の予定であると述べている⁶。当時ハイデガーは、ブルトマンから神学と哲学に関する公演を依頼されていた。しかしその内容は、真理の本質について扱っている。ハイデガーは、当時神学者と哲学者の役割をはっきりとわけるべきだと考えていたようであるが、この真理を扱う中に哲学者として神学への応答を考えていたともいえる。

さて、今現在『ハイデガー全集第9巻 道標』に収められている「真理の本質について」は、これらの講演の原稿をもとにして1943年に書き改められたものであるが、その内容の第一には、命題の真理は、自由に基づくことを押さえた上で、しかしその自由は、存在者を存在させることを意味しているのであり、脱存しつつ真理にさらされていることを主張している。ここで初めて真理が自由を得させると述べるのである。さらにハイデガーにとってその真理は、アレーティアとして捉えることにあった。つまり隠れ・覆蔵性（Verborgenheit）を取除くこととして真理を捉えるのである。ここで真理は、覆蔵性と非覆蔵性との運動として捉えられることになる。

ただハイデガーは、1943年の版では、「この存在者全体の覆蔵性は、露現しつつ既に覆蔵されつつ留まっている、そうして覆蔵へと関わっている存在させること自身よりも古い」（GA9, 194）とある箇所は、1930年の講演の版では、「この存在者全体の覆蔵性は、露現しつつ既に覆蔵されつつ留まっている、そうした存在者自身を存在させることと同じくら

⁶ A. Großmann u. C. Landmesser (Hrsg.), “Rudolf Bultmann/ Martin Heidegger Briefwechsel 1925-1975”, Frankfurt a. M. u. Tübingen, 2009, S.136.

い古いし、またただ同じくらい古い」⁷と述べられていたようである。ハイデガーは、講演から出版までの13年間に真理の覆蔵性と非覆蔵性との運動、両者の緊張関係について何度も問い直し、検討している様子が伝わってくる。1930年版では、覆蔵性は、存在者を存在させることと同じレベルで捉えられているのに対して、1943年版では、覆蔵性は、存在者を存在させることより古く、その根拠であることが示される。つまり1943年には、存在の覆蔵性が、真理の根拠であると主張する。言い換えれば、非真理が、真理の本質であるという主張へと至るのである。

ここで記された真理の緊張関係、覆蔵性と非覆蔵性とのせめぎあいについては、『真理の本質について—プラトンの洞窟の比喻と「テアイテトス」』（1931年32年冬学期講義）や『存在と真理』所収の「真理の本質について」（1933年34年冬学期講義）においても生き生きと記述されている。両者においてプラトンの『国家』にでてくる洞窟の比喻を用いて、真理論が論じられる。囚人が、洞窟から引きずりだされて、太陽の輝く地上にでてくる第三段階が、覆蔵性から非覆蔵性へと導かれる段階である。しかしその後その囚人が、洞窟に戻り皆を説得しようとするときに、殺されてしまう第四段階は、非覆蔵性から覆蔵性へと戻っていく段階となる。つまり、真理の覆蔵性と非覆蔵性との運動は、洞窟の中と外との行き来の運動として捉えられる。それ故1931年32年冬学期講義では、この事態を「根源的抗争（Kampf）」（GA34, 92）と呼んでいるし、さらには「橋をかけること（Brükenschlagen）」（GA34, 92）とも呼んでいるのである。さらには1933年34年冬学期講義では、「最も内的な対決（Auseinandersetzung）」（GA36/37, 184）と考えられる。この当時非真理と真理との運動、覆蔵性と非覆蔵性との運動を最も強力な緊張関係・抗争として思索していることが理解できると思う。

以上の事態は、さらに『芸術作品の根源』（1935年/36年）においても継続して思索されることになる。物議をかもしたゴッホの靴の絵やギリシア神殿という芸術作品において、存在の真理が現れているという。芸術の本質は、「真理がそれ自体を作品へと据えること」（GA5, 25）である。その真理は、「世界と大地の闘争（Streit）」（GA5, 35）である。誤解を恐れずに言ってしまうと、ここでも覆蔵性と非覆蔵性との闘争が述べられていることがわかる。

しかしさらにハイデガーは、この著作で覆蔵性と非覆蔵性との闘争の緊張関係自身を問うている。両者の関係は、対等であるのか、それともどちらかが根拠となっているのであろうかと。そして「拒絶することとしての覆蔵は、・・・明け開かれたものの明け開きの始まりである」（GA5, 40）という。つまり、真理の運動は、単なる対等な運動ではなく、覆蔵性が、非覆蔵性の根拠となっており、非真理が、真理の本質であるということを結論するのである。

そしてさらに『哲学への寄与』（1936年—38年）の「基づけ（Gründung）」のフーゲに

⁷ A. Rosales, „Transzendenz und Differenz. Ein Beitrag zum Problem der ontologischen Differenz beim frühen Heidegger“, Den Haag, 1970, S.311.

においても真理の問題が論じられる⁸。ここで存在の真理は、存在から可能となった現—存在の存在の思索自体が存在であるような存在と現存在との対向振動の出来事・性起(Ereignis)として、また時—空として捉えられた後、その根源として深淵・脱根拠(Ab-grund)が潜んでいると思索される。「真理は、出来事・性起の真理として基づける。この出来事・性起は、それ故根拠としての真理から概念把握される。つまり原—根底(Ur-grund)。この原—根底は、自己を覆蔵するものとしてただ深淵・脱—根拠(Ab-grund)として開示されてくる」(GA65, 380)と述べられる。真理は、覆蔵性と非覆蔵性との緊張関係の運動であったが、そこには深淵・脱—根拠・脱—根底が開けているのである。

しかしここで注意しておかなければならないことは、この深淵とは、ただ穴が空いているということの意味しているのではない。それは、深淵・脱—根拠・脱—根底という根拠・根底なのである。確かにハイデガーは、この根拠・根底としての脱—根拠・脱—根底(Ab-grund)の働きについて詳しくは語っていない。しかしそれは単なる無のではなく、原—根底(Ur-grund)としての脱根拠(Ab-grund)なのである。つまり、覆蔵性と非覆蔵性との対抗運動、せめぎあいそこから出てくる根底として、根底・根拠として深淵なのである。

1935年までは、現存在としての人間の超越の足元に、あるいはまた、人間の本質として深淵・脱根拠をみていた。1935年の『形而上学入門』では、存在と思索との関係が問われつつ、存在は神々と人間とのポレモスとして捉えられていた。そしてその根源として深淵・脱根拠が開けていることが指摘された。しかし1930年代以降ハイデガーは、人間の思索の契機が存在の思索の中に帰属し、存在の知、つまり存在の真理を問うことになる。存在の真理は、覆蔵性と非覆蔵性との闘争であった。しかも1936年にはその覆蔵性と非覆蔵性との闘争としての存在の真理に根拠・根底としての深淵・脱—根拠・脱—根底(Ab-grund)があることが省察されるのである。ここで深淵・脱根拠の本来の姿が現れてきたといえるであろう。しかしいずれにせよ、この深淵・脱根拠は、投企と被投性の緊張関係、神々と人間のポレモス、覆蔵性と非覆蔵性との闘争との根拠・根底として深淵・脱根拠なのである。

⁸ 実は、1931年32年冬学期講義においては、プラトンの洞窟の比喩の分析から真理の分析を行なった後にさらに、善のアイデアの分析を行なっている。この存在の真理の現れと隠れとの運動には、存在を超えたものが潜んでいることが洞察されているのである。洞窟の比喩の第三段階における太陽に当たるものが、善のアイデアである。ハイデガーは、この講義で善のアイデアについて「言い表しえないもの(das Un-sagbare)」(GA34, 97)であるといっている。ハイデガーは、「アイデアであることが、存在にとって力を授けることまた存在者を開示させることを意味している限り、この善のアイデアが凌駕していることは、このアイデアは、存在それ自身をまた真理をそもそも凌駕していることを意味している」(GA34, 108)と述べる。ここでは、ハイデガーが、存在の真理を超えた次元を見出していることが大事なことである。善のアイデアは、「存在それ自身を可能にするのでありまた非覆蔵性自身を可能にすること」(GA34, 109)なのである。ここでもハイデガーは、覆蔵性と非覆蔵性との緊張関係、闘争の根源に、それを超えた次元を見出そうとしており、さらにその次元が、存在の真理を可能にしている根拠なのである。しかしプラトンの善のアイデアが、存在と真理を超えて、存在と存在の真理を可能にしていること、ハイデガーが、存在を深淵として捉えていることとの間には、存在を超える次元を示唆するという点では同じであるが、善のアイデアは、真理を可能にする真理自身であるのに対して、存在の深淵は、真理の可能根拠として真理を超えたものであるという点で異なっていると思われる。

4) 『根拠律』における深淵・脱根拠について

この深淵・脱根拠の思索が頂点に達するのは、『根拠律』(1955年・56年冬学期講義、1956年講演)においてであるので、この項目の最後に省察しておきたい。

この著作は、ライプニッツの根拠の命題「いかなるものも根拠なしにあるのではない(Nihil est sine ratione)」の考察から入る。それは二重否定であるが、肯定文に直すと、「すべてのものは根拠をもっている」というふうになる。しかしこの根拠すなわちラチオは、近代以降の惑星的エポックでは主観・客観関係において見られた因果律としての原因とみなされる。しかし実は、そのような因果律の原因は、根拠のある一つの側面でしかない。そこでアンゲルス・シレジウスの『ケルビンの遍歴者』の中の「薔薇は何故なし(ohne warum)に咲く。薔薇は咲くが故に(weil)咲く」という詩句を取り上げ、実は薔薇が咲くのは、何故なしにはあるが、なぜならなし(ohne weil)ではないという。つまり、因果律の原因という意味では、何故なしではある。しかし実をいうと因果律の原因とは異なる根拠がある。今ライプニッツのNihil est sine rationeという命題を、nihilとsineを強調して読む読み方から、raitoとistを強調して読む読み方へと転換する。そうすると根拠と存在が同一である読み方ができる。しかしその根拠とは、因果律の原因ではなかった。それ故存在としての根拠(Grund)は、脱去しており、覆蔵しているのであるから、深淵・脱一根本拠、脱一根本底(Ab-Grund)なのであるという。

ここでハイデガーは、存在を深淵・脱根本底としての根拠として思索する。私たちは、これまで存在をアルカイ、原因(アイチオン)、ラチオ、ウアザッへ、プリンチピエンとして捉えてきたが、それらはすべて存在を捉え損なっているのである。つまり理性が、自らを根拠づけしようとする限り、その根拠づけからは、存在は抜け出てしまうのであり、それ故、根拠は、脱一根本拠、脱一根本底となるのである。

この著作において、ハイデガーは、完全に存在を深淵・脱根本底として捉えるに至る。しかし考えてみれば、「根拠の本質について」において超越論哲学が挫折する瞬間を深淵として捉えた考え方は、この『根拠律』においても生きている。つまり、理性が自らを根拠づけようとするときに、その試みは挫折するのは必然であることを述べているのである。深淵・脱一根本拠としての存在は、主観が主観の能力を使って作り出すことも、捉えつくすこともできない。むしろ逆に思索がそこから可能となる場なのである。思索は、存在からの命運としてやってくるのである。

さらにその深淵・脱根拠としての存在は、「死」として捉えなおされることになる。「遊びの本質が事象に即して根拠・根本底としての存在から規定されるであろうか。あるいは我々が存在と根拠・根本底を、深淵・脱一根本拠、脱一根本底としての存在を遊びの本質から思索しなければならぬのであろうか。この場合の遊びとは、我々が、現存在の最も極端な可能性として最高のものを存在とその真理の明け開けにおいてよくする死の近くに住む限り、我々がただそれ自身であるような、我々死すべきものたちがそこへともたらされる遊びで

あるのだが」(SG, 186-187)という。存在は、決して自然科学の因果律で究明されるものでも、理性という人間の能力によって根拠づけられるのでもなく、死によって支えられているのである。『根拠律』のここで深淵・脱根拠は、死であることが告げられる。存在は、死という人間を圧倒するもの、人間の手の届かないところにおいて示される。存在は、人間の思索の支配を逃れるもの、人間の知の届かないところでありつつ、同時に人間の思索の根源なのである。それ故存在は、深淵であるのだ。

第3節 神の思索

ハイデガーは、シェリングの自由論などの伝統の中で深淵・脱根拠の思索を導いてきた。投企と被投性との緊張関係、神々と人間とのポレモス、非覆蔵性と覆蔵性との闘争という相反する力の働きの淵源として深淵・脱根拠が広がっていることが明らかとなった。それら自身が存在を意味しているのである。今や存在は、深淵・脱根拠として捉えられる。しかもそれは死を意味していた。死が圧倒的に迫ってくるときに、我々人間は、人間の本質を知ることになる。ハイデガーにとっては、そのような次元に初めて神が関わってくるのである。その神は、最後の神あるいは神々と呼ばれるが、今回は『哲学への寄与』と『原存在(Seyn)の歴史』(1938年/40年)においてみていこうと思う。[ハイデガーの神は、神を事物存在としないために単数形で語るか、複数形で語るかを未決定にしている(GA65,437)。]

ハイデガーの思索する最後の神は、存在に現れる。「存在は決して神自身の規定ではない、存在とは、神の神になること(Götterung)が必要としているもののことである。完全に神から区別されたままで留まるために。存在とは(形而上学の存在者性のように)テイオンやデウスまた<絶対者>の最高で最も純粋な規定でもなく、・・・」(GA65, 240)と述べられる。また「原存在(Seyn)とは、神々によって必要とされているものである」(GA65, 438)と述べられる。ハイデガーは、神を語る時必ず存在の次元で語ろうとするのである。

『原存在の歴史』においても、「原存在<の>語において神性は一人間存在に向かい合っ

て一人間存在とともに大地と世界との闘争にやってくる」(GA69, 31)と語られ、また「あらゆる神よりも原存在は、始源的である」(GA69, 132)とも述べられる。つまり、ハイデガーにとっては、存在の思索が根本にあり、そこに神が現れるという構造を取っていることがわかる⁹。

しかしその存在とは、深淵・脱根拠なのである。それ故、神あるいは神々が現れるのは、

⁹ この立場を支持する主張として、Hans Hübner, „Vom Ereignis“ und vom Ereignis Gott. Ein theologischer Beitrag zu Martin Heideggers „Beiträgen zur Philosophie“, in: P.-L. Coriando (Hrg.), „Herkunft aber bleibt stets Zukunft“. Martin Heidegger und die Gottesfrage“, Frankfurt a. M., 1998, S. 156.を挙げることができる。ハイデガー自身、「ヒューマニズム書簡」(1947年)においても、「聖なるものは、しかしただようやく神性の本質空間であるにすぎないのであるが、それ自身再びただ神々と神とのための次元を守るものであるが、ただ、まずもって長い準備において存在それ自身が自らを明るみに出だしきって、その真理において経験された限りにおいて、輝き出してくるのである」(GA9, 338f.)、と述べる。つまりここでも、聖なる場、神々や神のでてくる場は、存在の次元であることが述べられている。

その深淵・脱根拠としての存在においてであるといえる。『哲学への寄与』においても「〈個人的な〉また〈大衆的な〉体験において神が現れることはまだない、唯一原存在自身の深淵・脱根拠の〈空間〉においてのみ現れる」(GA65, 416)と述べられる。また「〈神々〉は原存在を必要としていることが、神々を深淵・脱根拠(自由)へ動かし、あらゆる根拠づけや証明を拒絶することを表現している」(GA65, 438)と語られる。また『原存在の歴史』においても、原存在が深淵・脱根拠であることが度々述べられ(GA69, 61, 108, 119, 134)、さらに「神々は、〈存在する〉というのではない、むしろ神々は神々自身に戻され投げ返されることの深淵・脱根拠としての原存在を必要としているのである」(GA69, 105)と述べられる。

以上からもわかるように、ハイデガーにとって、神あるいは神々は、深淵・脱根拠としての原存在において現れるのである。ここからさらに神あるいは神々は、深淵としての死において現れるともいえる。

この神は、先に述べたように「あらゆる根拠づけや証明を拒絶する」、それ故「最も存在するもの、存在者の第一の根拠、第一原因、また無制約なもの、無限のもの、絶対者として」(GA65, 438)表象されてはならないのである。あらゆる形而上学また自己根拠づけまたあらゆる数量化を拒絶する神であるといえる。

ハイデガーは、以上のような特徴をもつ神を「過ぎ去り(Vorbeigang)」(GA65, 412)の神として思索する。形而上学を拒絶する神、自己根拠づけを拒絶する神、死としての深淵・脱根底に現れる神、存在と現存在の出来事・性起において現れる神、このような神は過ぎ去りの神としてのみ相応しい。

この過ぎ去りは、旧約聖書のいくつかの神のイメージから着想したといわれている。例えば出エジプト記 12 章 13 節の過ぎ越し(Vorübergehen)の神のイメージ。つまり、神がエジプトの民を打つとき、イスラエルの民の家を過ぎ越すという。また出エジプト記 33 章 22 節には、モーセが、神に神の栄光を示すように求めたときに、「わが栄光が通り過ぎる(vorübergehen)とき、わたしはあなたをその岩の裂け目にいれ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない¹⁰と神から言われるという物語。さらに列王記上の 19 章 11 節では、預言者エリヤがイゼベルの手から逃れる道で出会った主の言葉は、「主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて(vorübergehen)いかれた」というものであった¹¹。

¹⁰ 聖書からの引用は、『聖書』新共同訳、日本聖書協会、1997年を用いた。ドイツ語は、“Lutherbibel Erklärt. Das heilige Schrift in der Übersetzung Martin Luthers mit Erläuterungen für die bibellesende Gemeinde“, Stuttgart, 1964.を参照した。ハイデガーは、『宗教的生の現象学』(全集 60 巻)の Anhang II において、ルター研究の成果を報告していて、その中でルターの「ハイデルベルク討論」に言及している。その第 20 のテーゼには、この旧約聖書の言葉「神のうしろ」という言葉がでてくる。ハイデガーは、若いときから、聖書のこのような記述に慣れ親しんでいたようである。

¹¹ Vgl. R. Polt, „The Emergency of Being. On Heidegger’s *Contributions to Philosophy*“, New York, 2006. p.210.において、これらの旧約聖書の表現が、ハイデガーの過ぎ去りの概念に影響を与えたことを述

ハイデガーの過ぎ去りの概念は、決して地図上で測れる距離を意味してはいない¹²。彼は、*vorbeigehen* という言葉を用いながら、旧約聖書でくる過ぎ越しの神のイメージを用いて、人間が支配できる、人間が把握できる神、また理性的に自己根拠づけする神を拒絶し、人間の手をすり抜ける出来事としての神を思索しているといえるであろう。

従ってこの最後の神は、過ぎ去りの神として「貧窮化 (*Verarmung*) の贈与」(GA69, 28) を遂行する。ハイデガーは、形而上学を批判して、対象性としての存在の理解から、また主観による自己根拠づけから存在を解放して、深淵・脱根拠の存在理解を示した。この存在は、形而上学が示す絶対や無限を意味してはいないのである。それ故この存在は、深淵・脱根拠として有限な存在であるといえる。この有限な存在とは、既に形而上学が示してきた無限と有限との対立の内にはない。この深淵・脱根拠としての有限な存在理解は、それ自身貧しさ (*Armut*) の思索である (GA69, 106)。「貧しさとは、出来事化・性起化としての原存在の本質現成である」(GA69, 110)。貧しさは、深淵・脱根拠と深く、密接に関わっている。

それ故この最後の神自身が、貧しさの神であるともいえる。つまり、この神は、過ぎ去りとして一地点に君臨することはない。すべての人間の根拠づけや証明を拒み、形而上学の神として絶対者、無限者というふうに命名されることもない。そのような人間の認識・行為を拒み、そこから抜け出してしまうのである。そういう意味でこの過ぎ去りの神自身、貧しさの神であるともいえる。

しかもここでは、現存在としての人間は、沈黙という語りを選ぶのである。「ここから現一存在のあらゆる言葉は、その根源を獲得する、またそれ故現一存在のあらゆる言葉は、沈黙 (*Schweigen*) の本質にある」(GA65, 408) と述べられる。この存在と現存在との出来事・性起とそこに関わる過ぎ去りとしての神の出来事を、人間は沈黙という仕方でのみ表現できるのである。また『原存在の歴史』の 106 ページの図表において、「深淵・脱一脱根拠、無、貧しさ」の欄の下に「静けさ (*Stille*)」と書かれている。つまり、この深淵・脱一脱根拠としての存在の思索、過ぎ去りの神の思索には、ただ人間は静けさを通して接しうることを示している。この沈黙と静けさの思索は、貧しさの思索であるといえる¹³。

ただこの貧しさは、ただ単なる貧しさではない。ハイデガーは、ヘルダーリンの詩句を引用して、この貧しさは、「豊かになるため」の貧しさであることを述べる¹⁴。この貧しさは、不要なものを捨て去る貧しさである。つまり存在からのみ人間が規定されることである。そのときにこそ本来的な意味で、貧しくなり、同時に豊かになるのである。そのため神は、貧しさを贈ってくるのであろう。

べている。

¹² J. Stambaugh, „The Finitude of Being“, New York, 1992, p. 142.

¹³ 以上の貧しさの思索については、J. Greisch, „The Poverty of Heidegger’s „Last God“, in: D. Pettigrew and F. Raffoul (ed.), „French Interpretations of Heidegger. An Exceptional Reception“, New York, 2008, pp.256f. を参照した。

¹⁴ Vgl.M. Heidegger, „Die Armut“, in: „Heidegger Studies“ Vol. 10. Berlin, 1994, pp. 5f.

結び

ハイデガーは、1930年代以降このように存在を深淵・脱根拠として捉えていった。それは、存在を単なる類概念として捉えない、あるいは客体存在、対象存在としての存在理解を拒絶するとともに、主観の理性による自己根拠づけを拒み、そのような超越論哲学の自己根拠づけが発生してくる場を指摘していたといえる。これは結局主観性の形而上学の破れを示し、それを克服する場を確保していたといえる。近代の主観性の形而上学が、いったいどこから発生してくるのかという場を示すことでもあったのである。このような存在の思索は、「形而上学に反対する考えもない。比喻を用いて語れば、哲学の根を抜き去ることはしない。それは形而上学のために大地・根拠を掘り、形而上学のために大地を耕すのである」(GA9, 367)。それができるのは、存在を、なんらかの判断中止を迫るアルキメデス的点として捉えるのではなく、深淵・脱根拠として捉えられるからである。

さらに同時に、その深淵・脱根拠としての存在の場というのは、無であり、死とも言われた。またその場は、貧しさの場でもあった。それ故その場は、神秘の場であり、聖性の場であるともいえる。

ハイデガーは、ここにこそ神が関わってくると述べる。深淵・脱根拠としての存在という神秘の場においてこそ、神が関わってくるのである。ハイデガーの神は、それ故形而上学が思索する神とは異なって、形而上学の術語で捉えることのできない「過ぎ去る」神であった。そのような神は、存在を深淵・脱根拠と捉えるのと並行して、形而上学の手をすり抜けていく。あるいは形而上学の発生の現場を押しやるのが可能となる。

また以上のような深淵・脱根拠としての存在と過ぎ去りの神の出来事・性起の場は、人間の理性の届かない場であった。ハイデガー自身、その場を「言い表し得ないもの」と述べていた。それは例えば、シェリングの無底の概念から受け継がれているといえる。さらにこのような場は、ドイツ神秘思想の流れの中の否定神学の伝統を受け継いでいるといえる¹⁵。彼は、シェリング論において、シェリングの思索が展開するのは、マイスター・エックハルトやヤコブ・ベーメの思索の共遂行があったからだと述べる(GA42, 204)。また『根拠律』においては、マイスター・エックハルトの神秘思想に思索の鋭さと深さが潜んでいることを高く評価しているのである(SG, 71)。実はハイデガー自身、その伝統の中に身をおいていたからこそ、このような思索が展開できたといえるのであり、形而上学の克服が可能となるといえるであろう。このような存在と神との思索の試みこそが、「神に相応しい神 (der göttliche Gott)」(ID, 65)、「生ける神 (der lebendige Gott)」(GA5, 254)を求め、探そうとしている試みであると思われる。

¹⁵ ハイデガーの思索が、否定神学の伝統の中に位置づけられるとしている哲学者にデリダがいる。ただしデリダ本人の哲学は、決して否定神学ではないとしている。Vgl. J. Derrida, 'How to Avoid Speaking: Denials', In: H. Conward and T. Foshay (ed.), „Derrida and Negative Theology“, New York, 1992.

註

ハイデガーの著作は、全集ならば GA の略号を用いて、その後に巻数と頁数を文の後に記した。全集の著作と他の著作との本のタイトルは下記の通りである。

GA5: *Holzweg*

GA9: *Wegmarken*

GA25: *Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft*

GA34: *Vom Wesen der Wahrheit. Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet*

GA36/37: *Sein und Wahrheit*

GA40: *Einführung in die Metaphysik*

GA42: *Schelling: Vom Wesen der menschlichen Freiheit(1809)*

GA65: *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)*

GA69: *Die Geschichte des Seyns*

ID: *Identität und Differenz*

SG: *Der Satz vom Grund*